誤った情報がもたらす悲喜劇

京大人文研 90年の学知

⑨ 石川禎浩（中国現代史）

いしかわ・よしひろ　1963年山形県生まれ。90年、京都大文学研究科修士課程を修了し、京都大人文科学研究所助手に就任。現在、同研究所教授、付属現代中国研究センター長。博士（文学）。著書に『赤い星は如何にして昇ったか―知られざる毛沢東の初期イメージ』（臨川書店）など。

長い歴史を誇る人文研の中国学研究だが、近現代を扱うようになったのは、比較的近年のことである。近代史の共同研究班が発足したのが1966年、現代中国を重点的に研究する「現代中国研究センター」（現中研）が設けられたのは、2007年である。日本では、戦後のある時期まで、中国近代史、つまり清朝末期以降の歴史は学術研究の範囲外とされた。極端な話、20世紀中国は学術の問題ではなく、国策の対象であったと言ってよい。京大とて同様で、古典学者や歴史家が相手にする中国は、近代化以前の中国だった。

今や現代中国研究の重要性に疑問を挟む者はいない。とはいえ、「現中研」は専任教員3人の小組織に過ぎず、これで14億の民、9千万の共産党員を有する中国を相手にするとは無謀もいいところ。おまけに向こうさんの持っている資料は膨大で、かつガードも堅いとあっては、本家中国の優位性は明らかである。例えば、中国共産党についての研究、われわれが新事実の発見だと喜んで発表しても、向こうの党の歴史家は先刻承知で、「外国人にしては、よくやっているね」とお褒めの言葉を頂戴するのが関の山だったりする。言うなれば、卓球で中国代表に試合を挑むようなものなのだ。こちらが必死に練習して奇策を繰り出しても、すべて対応されて完敗、試合後に向こうが「ナイスゲーム」といって握手してくれる、とまあ、そんなところだ。

中華ソヴィエト人民共和國中央政府主席　毛澤東

1937年8月に、日本の政府広報誌に載った「毛沢東」のトンデモ写真。日中戦争時、日本は敵の顔も知らずに戦っていたのだろうか

4年がかりで迫った毛沢東の実像

では、どうしたらいいのか。昨年まで4年にわたって実施した「毛沢東」に関する共同研究班が一つの答えである。例えば上の写真、これは日中戦争勃発直後の1937年8月に、日本の政府広報誌に載った「毛沢東」の写真なのだが、どう見ても別人である。最初に見たときは、わたしも笑った。おかしすぎる。だが、同時に思ったのだ、「そうか、米人記者のエドガー・スノーが1937年末に『中国の赤い星』という取材記で、はじめて生の写真を出すまで、毛は謎の人物だったのだ。だから、時にこんなトンデモ写真が出ても不思議ではないのか」と。

そう考えると、スノーの『赤い星』で一躍有名になる前の毛沢東のイメージが気になってきた。こんなトンデモ写真があることを含め、党の顔になる前のことは、中国の専門家の誰も知らなかった。調べてみると、世界各地で変な「毛沢東」が次々と見つかった。別人もいれば、模写の出来損ないもあるが、単なるトリビアで済ませられない意義がそこにはあった。誤った情報・イメージの伝播がもたらす歴史の悲喜劇である。人は必ずしも正しい情報に基づいて行動するとは限らない。逆に誤った情報や認識によって判断し、とんでもない行動に出てしまう。それが歴史を作ってしまう。

それを毛のトンデモ写真に引きつけて言うならば、日中戦争勃発時の日本は、敵の顔すら知らずに戦っていたということになるだろう。その戦いの結末がどうなったかは、誰もが知るとおりである。今日でも、中国と日本との間の認識のズレや誤解は、さまざまなレベルで絶えず起こっているのだから、誤認の発生メカニズムを探ることは現実的意義を持つはずである。

こうした内容をその後、一冊にまとめ『赤い星は如何にして昇ったか』と題して出版したところ、幸いにして好評をもって迎えられ、近く中国語版と英語版も出る運びとなった。卓球で言えば、変わったサーブで何とか1セットとったということになるだろうか。また、昨秋に研究班のメンバー4人を講師にして行った連続セミナー「毛沢東―どんな男だったのか」も、毎回80人ほどの聴衆を集め、立ち見も出る盛況だった。まだまだやれるなあと実感した毛沢東研究の論文集「毛沢東に関する人文学的研究」（収録論文数15）は、この2月に刊行の見込みである。

（寄稿）

昨秋行った連続セミナー「毛沢東―どんな男だったのか」のポスター。2月には共同研究班メンバーによる論文集も刊行する予定

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

© 京都新聞社　無断複製・転載を禁じます